



令和7年 3月12日

南陽市議会議長 遠藤 榮吉 殿

保守公明クラブ

会派会長 山口 裕 昭

令和6年度 会派先進地等調査の報告について

このことについて、次により先進地等調査を実施いたしましたので、南陽市政務活動費に関する内規第4条の規定により報告いたします。

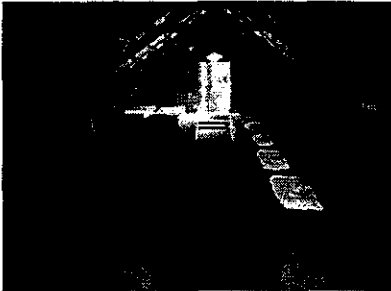
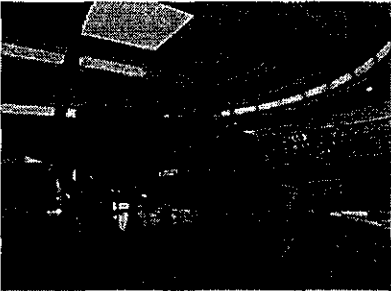
項 目	調 査 ・ 研 修 内 容
調査期日	令和6年11月12日(火)から14日(木)まで2泊3日
調査場所	① 鹿児島県南九州市議会 ② 鹿児島県垂水市議会
調査目的	① 知覧平和会館について ② 「たるみず元気プロジェクト」の取り組みについて
調査概要	別紙のとおり
その他	

12日(火) 視察先

視察内容

鹿児島県南九州市

知覧特攻平和会館



特攻隊から学ぶ戦争の現実と悲惨さ

今回の視察では、鹿児島県南九州市にある知覧特攻平和会館を訪れ、館長さんと職員の方から、貴重なお話を伺った。

米軍(約18万人)の沖縄上陸が始まった昭和20年(1945年)4月1日から、本土の最南端にある知覧の飛行学校は「陸軍特攻基地」となり特攻作戦が始まったとのことでした。

特攻隊員の募集は特に14歳から17歳で4,50倍になり、実際に特攻隊として飛行した戦闘員の年齢は17歳から32歳の若者たちで、平均年齢は21歳という説明を受けました。

彼らを戦争に駆り立てたものは何だったのでしょうか。

沖縄戦で特攻戦死された1036名の隊員の内、439名が知覧から飛び立った隊員で、特攻隊員の乗る飛行機には右翼に250キロの爆弾を積み、左翼には片道分の燃料を積んで、隊員を守る機関銃等は一切積むことなく、650km離れた沖縄を目指し、知覧を飛び立っていったとの話を聞き、どのような思いで操縦席に座り、操縦桿を握りしめていたのか、想像もできませんが、記念館に展示されている特攻隊員たちの最後の手紙を読んで、知ることができました。しかし投函する前に上官の検閲があるため、本当の心の叫びは書かれておらず、そのことが逆に、悲しみと苦しさ、無念を強く感じたのも事実でした。

平和会館には、特攻隊員の顔写真と、飛び立つ前に書かれた「遺書」の他に「遺品」が約6000点展示されています。

その場に立つと、あまりに切なく、胸が苦しくなりました。

そもそも何故彼らは死ななければならなかったのか。

まだ未成熟の若者たちの愛国心を利用して、世界の何処にもない野蛮で愚かな施策を何故行い、それを誰も止める事ができなかったのか。 残念でなりません。

多くの若者や、お亡くなりになった方々の思いを考えると、二度と戦争をするべきでなく、今の平和への感謝と、しっかりとこの時代を生きていく覚悟が大切だと強く感じました。

今も世界の何処かで戦争が起きています。

死ななくてもいい命、生きたくても生きることが出来なかった命を絶対に忘れてはなりません。

それは私たち大人の責任において、悲惨な戦争を今後、繰り返す事がないようにしなければなりません。

13日(水) 視察先

視察内容

鹿児島県垂水市

垂水市議会 堀内議長

垂水市

保険課 永田課長

保険課 大迫補佐

たるみず元気プロジェクトについて

2日目の視察に訪れた垂水市では、平成29年度から、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科心臓血管・高血圧内科学分野の大石充教授を「垂水市スーパーバイザー」として委嘱し、健康長寿や子育て支援に関する課題解決の取組を進めており、その取組の一環として「市民の皆様の健康長寿」を推進するための「たるみず元気プロジェクト健康チェック事業」を推進しています。

具体的には、鹿児島大学心臓血管・高血圧内科学の大石充教授を垂水市スーパーバイザーに迎え、40歳以上の市民を対象に、無料で18項目の検査を実施する「健康チェック」を通じ、一人ひとりの健康に関する課題の見える化を図る事業との説明を受けました。

令和6年度の予算は1,000万円を見込んでいて、申込者は男性362名、女性529名の合計891名とのことでした。

年代別の参加状況は、40代が5.6% 50代が10.6% 60代が22.2% 70代が一番多く41.3% 80代が19.1% 90代が1.1%という内訳で、「たるみず元気プロジェクト」の事業効果は、満足度99.3%と高い評価を受けているようだ。

申込者は令和5年度より35.1%の増加で、疾病等（心疾患、舌癌、認知症）発見者は、6か年で約90人とのことでした。

国保医療費については、一部に減少傾向があるが、長期的に調査が必要で、今後評価方法を整理して結果を出したい。との説明でした。

また、日本遺産である武家屋敷群「麓」も視察しました。

山白跡の周辺に配置された「麓」と呼ばれる外城には、武家屋敷群が数多く残っており、道沿いは、石堀と生垣が数百メートルも続き、門と玄関の間に生垣を設け、城の中のように敵に備えた構造は他にはない景観で、観光客を楽しませています。

今回の視察で訪れた鹿児島県の人々は、活火山・桜島と共にたくましく暮らしています。古くは縄文時代から噴火の被害に遭っていますが、桜島からの恩恵を上手く生活に活かしています。

例えば、火山灰が積もった大地は水はけが良く、桜島小みかん栽培、魚の灰干し、火山灰を使った陶芸、溶岩の焼肉プレート等など、火山の恵みが、観光資源に繋がっています。

